

「やあぁ……」

いまにも消え入りそうな甘く艶やかな声に、フェイトは耳の奥が痺れるような錯覚を覚えた。

「ん、あ、はぁ……ん」

何度も何度も、これまで毎日のように聞いてきたはずの声。

「だ、め、あ……あぁ」

それが、いくら記憶を掘り起こしても、いまフェイトの耳に流れてくるその声に合致しない。

いや、それも当然だった。

フェイトにとつても初めてなのだ。

なのはの、こんな姿を見るのは。

「あぁぁ……んんっ」

身体が芯が熱くなるのを感じて、フェイトが小さく身をよじる。

くちゅ、というかすかな音。

なのはの下腹部、まだ真っ白なその丘に一本の朱色のスリットが浮かび上がっている。

それが二本の指で押し開かれるたびに聞こえてくるその音に、フェイトは自分の同じ箇所が同じ反応をしていることを恥ずかしく思いながら、しかしどうすることもできずにただ耐えるしかなかった。

「な、のは……」

その名前を呼ぶだけで、身体の火照りが増すのを感じる。

「あぁ、なの、は」

フェイトは、両手首をハンカチのようなもので縛られた状態でソファに座らせられていた。

奥には、フェイト程度の身体の大きさなら四、五人は寝られるのではないかというサイズの天蓋付きのベッドが据えられている。

その上で、二人の少女がともに肌をさらけだし、互いに身体を絡め合っていた。

「あ、も、もうやめ……て……」

ようやく胸が膨らみ始めたばかりのまだ幼い肢体を紅潮させたなのは。

「こんなに濡らしておいて、やめて、じゃないでしょ」

そしてなのはを背後から抱きしめ、その肌を指を、首筋に舌を這わせているのはアリサだった。

「いつもよりずいぶん感じてるじゃない。やっぱり、フェイトに見られるのが嬉しいの？」

「ちが……っ！ やあぁっ……」

アリサの問いかけに、なのはが大きく首を振る。

「ほら、もっと脚を開いて。フェイトによく見せてあげなさい」

アリサは両手をなのはの太股の下に差し込むと、そのまま左右に大きく広げてみせた。

「だめええええっ!」

身体を揺すって逃れようとするのはだったが、アリサは構わずに自身の両脚をなのはの両脚に絡めて押さえつけ、その体勢のまま固定してしまう。

「やあ……おねがい、みないで、フェイトちゃん……」

目尻に涙を浮かべながら、なのはが哀願するような瞳でフェイトを見る。

「なのは……」

だが、フェイトはなのはから、いや、なのはの開かれた両の股、その付け根のあいだで赤くひくつく膣口から目が離せなくなっていた。

あれが……なのはの……

ごくり、とフェイトの喉が鳴る。

これまでも、風呂と一緒に入ったときなど、見たことがなかったわけではない。

だが、それはあくまで視界の隅に入ってしまったという程度のことにはすぎず、いまのように正面にさらけだされたような状態で目にしたことなどなかった。

「ほら、フェイト。なのはのここ、嬉しそうでしょ?」

アリサがなのはの膣口を今度はフェイトに見せつけるように広げる。

フェイトの耳に響く湿った音。

「いやああああ……」

なのはが両手で顔を押さえる。

「なのははね、こうやって広げられながら、ここをいじられるのが好きなのよ。覚えておきなさい……フェイト」

アリサはなのはの膣口をさらに大きく開いてみせると、小さいながらも膨らんでいるのがはっきりとわかる陰核の先端をそっと撫でた。

「ひいああああああっ!」

なのはの身体が大きく跳ねる。

「それから、胸と一緒に責められるのもお気に入りよね、なのは」

片手でなのはの股間をいじりつつ、もう片方の手でなのはの乳房の先端に触れる。

「ひゃあっ!」

乳首と陰核、二箇所を同時に責めながら、アリサはなのはのうなじに舌を這わせた。

「あ、ひ、は、や、だめ、やめ、も、ああ」

アリサの指の動きに合わせて、なのはの口から嗚咽のような声が漏れる。

「やめ、て、も、あ……ああ」

なのはがするような目でアリサを見るが、アリサは意に介することなく愛撫を続けた。

「おねがい、やめ、やめて、だめ、もう、あ、ひあ」

何度も、やめて、という言葉を繰り返すのはだったが、

はたしてそれが本心なのかは、フェイトにもわからなかった。

いくらアリサに両脚を抑えられているとはいえ、本当に嫌ならば、絶対にふりほどけないというわけではない。

いや、そもそもアリサに脚を広げられたときも、なのは多少は抵抗しようとしていたが、結局はアリサにされるがまま、むしろ自分の意思で脚を開いたようにも見える。

そしていまま、なのはは口ではやめてと言っているが、その身体はまるで自ら求めるように、アリサの指の動きに合わせて腰を振り始めていた。

「フェイトちゃん……見ちゃいやあ……」

そして、それはある意味フェイトも同じだった。

見ないで、と言われながら、目を閉じることも目を逸らすこともできない。

手首を縛られているとはいえ、身体そのものを固定されているわけではない。それどころかその縛っている布さえも、その気になれば振りほどいてなのはを助けることも容易いのではないかという程度のものだ。

だが、実際にはフェイトは身動き一つすることなく、一心になのはの痲態を見つめている。

「や、ひ、ああ、だめ、そこ、あ、おっばい、いじつちや、あ、あそこも、は、ああ、んあ、ふあああつ……」

なのはの腰の動きが早くなる。

喉の奥からの漏れるような嗚咽が、嬌声へと変わる。

「や、あ、おっばい、あ、そこ、ああ、ん、あああああ、あ、あ、あ、あ、あふ、ああああんっ」

「ほら、我慢することないわ。イっちゃいなさい。フェイトにいくところ見せてあげなさい」

「あ、フェイト、ちゃん、ああ、フェイト、ちゃん、フェイトちゃん、フェイトちゃん、フェイトちゃん……っ！」

なのはの視線が、フェイトのそれと重なる。

「フェイトちゃん、フェイトちゃん、フェイトちゃんフェイトちゃんフェイトちゃん……っ！」

と、それまで指先で丁寧に愛撫を繰り返していたアリサが、不意になのはの乳首をひねるようにして強くつまんだ。

「ひいっ！」

なのはの身体が大きく跳ねる。

と同時に、アリサが爪でなのはの陰核を引っ掻くようにはしく。

「い、あ、あああああああああああつ！」

悲鳴にも似た声とともに、なのはは背を大きくのけ反らせると、そのまま全身の力が抜けたかのようにぐったりと背後のアリサにもたれかかった。

「あ……ああ」

四肢を痲痺させ、荒い呼吸を整えようともせずアリサに身を委ねるのは。

「よしよし、と」

肩のあたりを支えながら、アリサがそのままそっとなのはをベッドに寝かせる。

なのはは身動き一つしない。

だらしなく開かれた両脚、その付け根から太股まではぐつしよりと濡れ、股間からは愛液が未だ溢れるかのように噴きだしている。

目には涙を溜め、口元からはよだれを垂らしながら、なのははただじっと虚空をあおいでいた。

「ほら、まだ終わりじゃないわよ、なのは」

アリサが、なのはの頬に手をあてる。

「ま……だ……？」

「当たり前でしょ。これくらいじゃまだまだフェイトには伝わらないわ」

アリサがフェイトに視線を向ける。

フェイトは言葉を失っていた。

なのはが達したときの声、それが頭の中まで響いて離れない。

初めて聞く、なのはの淫らな声。

初めて見る、なのはの淫らな姿。

それがフェイトの耳に、目に、焼き付いて消えなかった。

「フェイト……ちゃん」

なのはがゆつくりと上半身を起こす。

「アリサちゃん、わたし、もっと……もっと」

「わかってるわよ、ほら」

アリサはなのはの口元のよだれをぬぐうと、そのまま指をなのはの口の中に挿し入れた。

「んむう……ふあ」

なのはが舌先をその指に絡める。

「ん、く、む、ふあ……ああ」

「なのはは、こうやって口の中を愛してもらうのも好きよね」

アリサがそっと指を引き抜くと、なのはの唾液が糸を引き、それが光を反射して輝いているようにフェイトには見えた。

「それで……ほら」

アリサがなのはの股間に再び手を伸ばす。

先ほどの絶頂の余韻が、まだかすかにひくついているなのはの恥丘に手のひらをあてると、アリサは濡れた指先を押し入るようにしてなのはの膣口に挿入する。

「ああああああんっ！」

なのはの身体がまた小さくのけ反った。

「ああ、い、あ、あそこ、なか、いい、あ、もっと、んん……！」

アリサの指の動きに合わせるかのように、なのはが再び腰を振り出す。

ベッドの上に座ったまま、段々と脚を広げて前のめりになりながら、なのは自ら股間をアリサの手にすり寄せるように動かした。

「なあに、なのは、ここも一緒にいじってほしいの？」

アリサが親指で陰核に触れる。

「ひああああっ！」

アリサに抱きつくようにしてなんとか自分の身体を支えるなのは。

「ああ、いい、そこ、もっと、なか、も、まめ、も、もっと、あ、ああ」

「なのは、この豆はね、クリトリスって言うの」

「くり……とります？」

「そう、ほら、いじられると気持ちいいんでしょ？」

「ああ、うん、いい、クリトリス、いい、もっと、ああ、ああああっ……」

「なのはの気持ちいいところ、全部フェイトに覚えてもらいなさい」

アリサが、なのはの身体をフェイトに向ける。

「いい、よ、フェイトちゃん、ここ、なかも、クリトリスも、きもち、いいの、ああ、みんな……」

なのはが、自らの指で膣口を押し広げる。

「きもち、いい、もっと、ああ、フェイトちゃん、みて、ここ、いいの、きもち、いい、あ、ああああ」

自らの痲態を惜しげもなく晒すなのはの姿に、フェイトは身体の底がじわりと熱をおびているのを感じていた。

「ん……っ」

へその下あたりが締め付けられような感覚に、太股をきつく閉じる。

「ああ……」

だが、身体の熱は治まるどころか逆に全身へと広がりが、心臓の鼓動は胸に手をあてなくともわかるほどに早くなっていた。

フェイトが、押しつけた左右の太股をゆっくり上下に動かす。

「……っ」

ぬるり、とした感触。

ここ、これ、濡れ、てる……？

「あ……ああ」

それを自覚した瞬間、それまでなんとか押さえ込もうとしていた身体の火照りが、一気に全身に広がったような感覚に襲われ、

「ん、う、あ」

もどかしげに、何度も太股を擦り合わせるフェイト。

「……フェイト、こっちにきなさい」

その様子に気づいたのか、アリサがフェイトに声をかけた。